

## 言語学 Café

### - ある兄弟の言語学談義（４） -

宮下 博幸・久保 さやか

#### 「おばさんの的に」から冠詞の問題への巻

いつものカフェ。なにやら妹が上機嫌に話している。兄はエスプレッソを片手に相づちをうちながら適当に聞き流している。

妹：ズズ。（昆布茶をすする）でね、今度言語研に新しく入った女の子は、まだ修士課程の若い子で、イディッシュ語をやってるんだって。同じくマイナー言語をやってる私としては、是非とも応援したいな。

兄：応援してあげてください、おばさんの的に。

妹：ちょっとそれ聞き捨てならないわね。「おばさんみたいに」だったら必ずしもまだ「私＝おばさん」ってわけじゃないけど、「おばさんの的に」って言うと、「おばさんとして」とか「おばさんなりに」って意味にもとれて、「私＝おばさん」ってことになるじゃない、もう！

兄：なかなか自虐的な深読み。でも自分で言っというてなんだけど、「おばさんの的に応援する」ってのは、なんとなく不自然な気がするな。「熱血おばさんの的に応援する」なら少しはよさそう。うーん、「的」ってのは考えてみるとなかなか面白いな。「わたし的にはオッケーなんです」なんていう、なんとなく変な言い方も、よく耳にするし。こういう言い方と、今の「的」の使い方は、またちょっとばかり違う気もする。よし。それでは今日はいっちょ「的」について考えてみるとするか。まずは「的」を伴う句が、形態的にどういうふうに見えるかを見てみたいな。じゃ、調査よろしく。

妹：またまた兄さんの的な無責任。えーと。じゃ、ヤフーで検索してみるよ。じゃあ、とりあえず「わたしの」「おぼさんの」を調査。あ、けっこうたくさんあるね。

a)「わたしのな」「おぼさんのな」

- 1) この中のわたしのな目玉は...
- 2) わたしのな記念品です。
- 3) わたしのな好みでいうとこっちの方が上です。
- 4) 見るからにおぼさんのな服
- 5) 「栄養士」というのは2年勉強すれば取れる資格ですが、できる仕事は早い話、給食のおぼさんのな仕事しかないので。

このタイプの例は「わたしの個人的な」や「おぼさんっぽい」って言い換えられるみたい。

b)「わたしのに」「おぼさんのに」

- 6) わたし的に感じた事.....
- 7) みなさん、大変なことが起こりました(わたしのに)
- 8) おぼさんのにちょっと言わせてもらおうと...
- 9) なんとんでもおぼさんのに感動したのはここ！

「わたしのに」は「わたしが個人的に」とか「わたくし個人にとっては(大変)」に、「おぼさんのに」のほうは「おぼさんとして」とか「おぼさんが」って言い換えられるよね。

兄：そうだね。さらに「わたしのに」と「おぼさんのに」の両方をまとめるように言い換えるとすれば、「～の立場からみて」ってことになるかな。

妹：「わたしの立場からみて感じた事」、「おぼさんの立場からみて感動したのはここ」。そうだね、それでだいたいうまくいきそう。それから他のタイプがまだあるよ。

c)「おばさんのになる」

10) 体型的にもおばさんのになりますし。。。。

11) 恋愛に関しては、お見合いおばさんのになってしまいがちです。

これは「おばさんっぽく」、「お見合いおばさんみたいに」って言い換えられる。

d)「おばさんのだ・で」

12) しかし「ふく子」という名前はイメージがおばさんのだなあ。

13) おばさんのではないが、かといって幼さも無い。

14) 男女とも彫りの深い顔立ちで、ヒューム族から見ると、「おじさんおばさん」的で人懐っこい性格をしています

これも「おばさんっぽい」で言い換えられるね。

e)「おばさんの～」

15) 実はこのふたつは十分おばさんの統一性がある...

16) まだ若いインターネット社会だからこそ、おばさんの存在が必要なのだろう。

これは「おばさん特有の」や「おばさんのような」って言える。

兄: ってことは、まず形態的に整理すると、「おばさんの～」(付加語的)「おばさんのな」(付加語的)「おばさんのだ」(述語的)「おばさんのに」(副詞的)があるってことだね。「的」をつけることで、名詞がいわゆる形容動詞になるわけだから、こういうバリエーションがあるのは納得できるけどね。まあ「おばさんの～」だけは例外になるけど。それじゃあ意味の面ではどうだろう。おまえの言い換えはいくつかのパターンにまとめられるようだな。さらにその意味とそれぞれのタイプの形式の関係はどうなっているか。表にまとめよ!

妹：まったく人使いが荒いなあ、兄さんは。

付加語的：「おぼさんの～」	「おぼさん」っぽい、みたいな
付加語的：「おぼさんのな」	
述語的：「おぼさんのだ」	
副詞的：「おぼさんのに」	「おぼさん」の立場からみて

こうやってまとめてみると、「おぼさんのに」ってときだけ「主語＝おぼさん」が確立してるような気がするんだけど、兄さんはどう思う？

兄：そうだね。でも副詞的に使われた「～的に」も、場合によっては「ぼい」の意味で使うこともできそうだね。さっき話したように、例えば

17) 熱血おぼさんのに応援する妹を見た兄は、その変わりように驚いた。

は「熱血おぼさんみたいに」ってことだろうから、そうすると

9) なんと言ってもおぼさんのに感動したのはここ！

みたいな例とは違っているよね。「なんと言ってもおぼさんみたいに感動したのはここ」じゃ、この文の意味と違ってしまう。つまり「おぼさんのに」は2つの解釈ができて、ひとつは普通の「おぼさんっぽく、みたいに」という解釈、もう一つは「おぼさんの立場から見て」という解釈ってわけ。それはそうとして、上の例のc)からe)の形式には「おぼさんの」の例しかないね。「わたしの」はこういう場合にはだめなのかな。

妹：「体型的にもわたしのになりますし」、「わたしのではないが、かといって幼さも無い」、「まだ若いインターネット社会だからこそ、わたしの存在が必要なのだろう」、「おぼさんの」に「わたしの」を代入してみると、どれもなんだかおかしいね。

兄：で、どうして？

妹：うーん、「わたし」という個人がどういう特徴を持っているか一般的に知られていないから、「私っぽい」という意味の形容詞にはなりにくいんじゃないかな。ということは、会話なんかで、相手が、「わたし」がどういう特徴を持っているか知っている状況であれば、不可能じゃないかも。例えば「わたし」がとてもスリムな体型をしていて、相手もそれをよく分かっている場合、「あなたももう少し頑張れば、体型的にもわたしのになれるんじゃない？」なんて言えそう。それに比べて「おばさん」はおばさんについての一般的なイメージができあがってるもんね。

兄：つまりこういうことになるかな。「～的」は言い換えしてみるとわかるように、「～の特徴をそなえた」って意味を付け加える働きをしている。そこで「的」の前に来る名詞が、ある特徴を備えたものとしてイメージしやすければしやすいほど、「的」の前に入りやすいってこと。だから「おばさん」はOK。反対に「的」の前の名詞が、あまりに一般的で、具体的な特徴をイメージしにくいものや、「わたし」って表現みたいに、まず「わたし」という表現が誰をさしているかわからないと、「わたし」がどのような特徴を備えているのかが特定できないようなダイクシス表現の場合は、「～の特徴をそなえた」って意味では「的」の前に立つのが難しい。それじゃ、ちょっと試してみようか。

18) ? 太郎的な

    ? コーヒー的な

    ? 猫的な

これだけ見てると、なんとなく変な感じがする。そう感じるのは、太郎がどの太郎をさしているかわからないため、どんな特徴を持っているかわからないし、コーヒーや猫については、こういった名詞の持っている特徴のどんな部分に着目してイメージしたらいいのかわからないからだと考えられるね。これに修飾句を加えて、それぞれの名詞の具体的なある側面を際立たせると、

19) 岡本太郎的な

ネスカフェのコーヒー的な

都会の猫的な

だいぶよくなるね。ここでは修飾句によって名詞のもつさまざまな特徴のうち、性格、種類などの特徴がクローズアップされ、そのことで容認度があがるんだろうね、きっと。ここでさっきの「わたしの」がどうしてc)からe)の形式で現れた例が見つからなかったのかっていう疑問に戻ろう。今考えてきたことからすると、その答えはつまりc)からe)が「~の特徴をそなえた」って意味にとられやすい形式で、そういった意味では「わたしの」が現れにくいだけだということだね。ここで面白いのは付加語的な用法のa)。これも用法的には本来「わたしの」はあらわれにくいはずの環境。でもそこでも「わたしの」が出現している。例を再録。

1) この中のわたしのな目玉は...

2) わたしのな記念品です。

3) わたしのな好みでいうとこっちの方が上です。

でもこのときの意味は実はどれも「的に」で見られた意味「~の立場からみた」になっている。面白いね。さらにここで注目したいのは、「~の立場からみて」って意味で使われるとたん、「わたし」をつける可能性が生じるってこと。「~の立場」だったら、べつに「わたし」や「太郎」でも問題ないよね。さらには「広さ的に」「大きさに」のように抽象的な名詞でも大丈夫になる。だから「~の特徴をそなえた」の用法のときには出てきにくいこういった名詞が「的」の前にくると、自動的にこの用法として解釈されることになる。ここでさらにちょっと考えてみたいことがあるな。そもそも文体的な観点で見ると、ここまで見てきた「的」を使った言い方はどちらかというと、どれも話し言葉的な印象を与えるよね。「的」が一番普通に使われるのは、「客観的」「言語学的」「辞書的」なんか

のように漢語といっしょの場合。とすると、いままで見てきた「的」と、漢語といっしょに使われるときの「的」との関係もちょっと考えてみたいね。漢語と使われる「的」の用法と、いままで見てきた「的」の用法との関連はどうなってるかな？

妹：ちょっと待って。まず「的」が漢語とどんなふうに使われるのか、goo 辞書 (<http://dictionary.goo.ne.jp/>; 『大辞林』第二版、三省堂) で確認してみると

(ア)主に物や人を表す名詞に付いて、それそのものではないが、それに似た性質をもっていることを表す。...のよう。...ふう。

「百科事典 な知識」「スーパーマン な働き」「母親 な存在」

(イ)主に抽象的な事柄を表す漢語に付いて、その状態にあることを表す。

「印象 な光景」「積極 に行動する」「定期 な検診」

(ウ)物事の分野・方面などを表す漢語に付いて、その観点や側面から見て、という意を表す。上(じょう)。

「学問 に間違っている」「事務 な配慮」

〔(ア)~(イ)は、もと中国、宋・元の俗語で「の」の意味を表す助辞であったものを、明治以降、英語の -tic を有する形容詞の訳語に用いたことに始まる〕

この3つのうち(ア)は「~っぽい、みたいな」だから、「おばさんの」に相当するっていえそう。(イ)に当たるのは、名詞の部分が漢語じゃないときにはないかも。この辞書でも抽象的な事柄を表す「漢語」に付くって書いてある。残りの(ウ)がだいたい「~の立場からみて」にあたる用法かな。「学問の立場からみて」や「事務の立場からみた」って言い換えられるし。ここでも「漢語」に付くって書いてある。漢語に付かない場合の「わたしの」は、確かに話し言葉っぽいね。

兄：ではここで、辞書の記述を文中での機能の観点からもうちょっと整理してみよう。例えば次の例

## ２０）母親的に忠告する

は書き言葉でもごく普通の（ア）の用法だよね。これは「忠告のしかたが母親的」で、「母親的」が「忠告する」という述語をじかに修飾している。これは動詞修飾的用法と呼べる。それに対して（ウ）にあがっている例

## ２１）学問的に間違っている

は、「間違いかたが学問的だ」というふうにはとれず、むしろ「学問の立場からみて」って言い換えでわかるように、「学問的に」が文全体にかかって、「間違っている」という文に対して主観的なコメントを述べている。つまり２０）のように述語をじかに修飾してはいないってわけだ。この用法の「学問的に」の部分には

２１）’私が学問的にみるところでは、間違っている。

というふうに、さらに詳しく主観的な部分を補えるよね。この用法には主観的な観点が見て取れるから、主観的用法と呼んでもいいかな。

妹：その観点や側面から見ると、イコール主体が存在する、ということね。

兄：そういうこと。この主観的用法は辞書の（ウ）にあるように、基本的に漢語と使われるけど、漢語以外の名詞と使われると、「わたしの」「おばさんの」のような表現を聞くと感じるように、話し言葉っぽくなる。漢語以外の名詞が「～的に」と一緒に現れるかどうかという点が、主観的用法に関する書き言葉と話し言葉の制限の第一の違いだといえそうだね。さて（ア）の普通動詞修飾的に現れる「母親的に」は、実は主観的用法でも使える。

２２）母親的に、それは許せない。

だと主観的用法になるね。でも、こうするとなんとなく会話っぽくなる。つまり話し言葉っぽさは、普通動詞修飾的に現れる「～みたいに」の用法が、主観的に使われることでも出現するといえる。つまり、書き言葉と話し言葉のもう一つの違いは、「～みたいに」の用法を主観的用法にまで拡大して使えるかどうかという点にもあるといえそうだね。その一方で主観的用法の例で出てきた「学問的に」は、

### 23) 学問的に調査する

というふうに、動詞修飾的にも自然に使うことができる。これは「おばさんの」のところで話したけど、「おばさんの」も場面さえ整えば、両方の解釈ができたんだ。えー、とすると、ここまででわかったのは、「～みたいに」に典型的に見られる動詞修飾的用法と、「～の立場からみて」っていう主観的用法は、漢語が付く場合にもすでにあるってことだね。「おばさんの」や「わたしの」なんかの表現は、おそらく最初からあった漢語のときの用法が、漢語以外にも一般化して生まれたんだらうね。こういう表現が生まれる土台は、漢語が付くときの用法にあったというわけ。また辞書の説明にあるように、「～的」が中国語の「の」から出てきたものだとすると、「っぽい、みたいな」や「～の立場からみた」って機能は、日本語で発達した機能ってことになるかな。もちろん英語の影響も考えられるけど。ついでに言うと、今の中国語でも「的」はほぼ日本語の「の」に対応するのが普通で、たとえば「母亲的存在 (mǔqīnde cúnzài)」だったら、あくまで「母親の存在」って意味で、「母親のような存在」っていう意味にはならない。上の用例の中では、(イ)がどちらかという中国語本来の用法に近いみたい。さて、ここでまた疑問がわいてくる。じゃ、どうして「～的」って表現にはこの二つの用法が同居しているんだらうか。一見すると、この二つの機能にはあんまり共通点がなさそうだよな。

妹：そうだね。それで、どうしてその二つの機能があるわけ？

兄：え、それはお前が考えるんじゃないの？まあいいか。じゃ、ここでは副詞的に使われた「～的に」を詳しく見てみよう。このときにはどちらの用法もあるんだった。

2 1 ) 学問的に間違っている

2 3 ) 学問的に調査する

は同じ「学問的に」だけど、用法的にはそれぞれ違っているんだった。そうすると問題は、ここで「学問的に」にどうして二つの解釈があるのかってことになる。このふたつの解釈の決め手になっているのはどんな条件？

妹：比べてみるとわかりやすいね。2 1 ) のほうの「間違っている」が主観的判断だから、「学問的」のほうにも主観性が引き出されてしまう、ということかな。これを生成音韻論的に表してみると

～的に	/	_____	述部
[ - 主観性 ]	[ + 主観性 ]		[ + 主観性 ]

ってなふうにまとめられるでしょうか。漢語以外+「～的」の場合も、b) の6)、7)、9)の例文を見てみると、「感じた」とか「大変な」とか「感動した」という主観的な判断や評価を表すことばが述部にきてるよね。とすると、動詞修飾的な用法に主観性を加えると、「～の立場から見て」という意味のできあがり、ってこと？

兄：まあ、だいたいそんなふうに考えられそうだね。そのあたりをもう少し詳しく考えてみよう。ここで問題は「主観的判断」とはどのようなものかってこと。例えば「間違っている」っていうのは、主観的判断というより、本来的にはある出来事の状態の描写だと考えられるよね。でも「間違っている」という状態表現には、簡単に「～と思う」「～はずだ」「～と信じる」といった上位の述語を読み込むことができる。というより、その発言がある判断能力をもつ話し手によって行なわれるとするなら、聞き手はそういうのが当然入っていると考える。このような目に見えない上位の述語があるとすると、

主観的用法の「～的に」は、その上位の述語を動詞修飾的に修飾していると考えられるんじゃないだろうか。例えば21)'の主観的用法の言い換えを、さらにちょっと変形させると

#### 24) 間違っていると私は学問的に思う

となる。ここで「学問的に」は単に動詞修飾的に「思う」を修飾しているよね。ここで「私は学問的に思う」の部分が意味的に「学問的に」に圧縮されて出てくるのが、「～的に」の主観的用法だと考えられるんじゃないかな。だとすると主観的用法は、言葉には表れてこない上位の述語の機能が「～的に」の中に融合して、表現として成立しているといえる。ところで、おまえが生成音韻図でまとめたように、「～的に」の主観的用法は、主観的判断をもつ述語がある環境で出てくる機能だった。とすると主観的判断の部分は、述語の部分が含んでいる機能であって、「～的に」の部分に主観的な機能があるわけではないんじゃないか、って考えも浮かんでくる。じゃ、ここでまた質問。述語とは独立して、「～的に」の部分だけでもすでに主観的な機能が表現されるんだ、って主張するためには、どんな証拠が必要だろうか。

妹：「～的に」が主観的判断を表す述語以外の述語といっしょに使われているにも関わらず、主観的用法が現れるような例があればいいんじゃない？

兄：そのとおり。で、どうやらそういう場合がありそうなんだよね。例えば「感じる」は自分の経験の描写を行なう動詞で、主観的判断を述べる動詞ではなさそうだよ。だから

#### 25) うそだと直感的に感じる

の「直感的」は、動詞修飾的な解釈になる。一方同じ「直感的」でも

#### 26) それは直感的に間違っている

だと、当然ながら主観的用法になる。ところが

6) わたし的に感じた事……,

は上のような性質の動詞「感じる」といっしょに使われているにもかかわらず、主観的に使われているよね。このように「～的に」は主観的用法を表す形式として独立してきている。ということは「～的に」っていう形式に、すでに主観的判断が入り込んでいるといえるんじゃないかな。

妹：そうか、それで納得。例の問題発言「応援してあげてください。おばさんの的に」を、私が「おばさんの立場からみて」のほうの意味にもとれるって感じたのは、「～的に」って形式全体が「～の立場から見て」っていう機能をすでに獲得しているからなんだ。

兄：だからおまえが深読みしたんだらうな、きっと。でも、ここまで考えてきた動詞修飾的用法から主観的用法への広がり、どうやら「～的に」の特徴みたいだね。たとえば「～的」以外の形容動詞にはこういう広がりはないみたい。例えば「あざやかに」が「あざやかな立場からみて」に広がるようなことはないよね。ただし「明らかだ」から出てくる「明らかに」だけは「～的」と似た広がりあるとっていいかもな。「明らかに」は「明らかに間違っている」のように文全体を修飾する副詞として使われるよね。でも考えてみると「～的」の用法の広がり、英語の副詞の用法の広がりとかなり重なっているね。もしかすると「～的に」の主観的用法は、英語の影響で成立した可能性もあるな、辞書に書いてあったけど。でも、もしこれが借用だとすると、これは文字通りの借用ではなくて、英語が持っている認知的枠組みの借用だっていえるね。

妹：借用と一口に言っても、いろいろあるね。ところで、「おばさんみたい」アンド「おばさんとして」の話で思い出したんだけど、ノルウェー語で「～みたい」は som で表すのね。で、som en bror (as a brother) は「兄のように」って意味だけど、bror の前にある不定冠詞 en をとって、無冠詞にすると som bror は「兄として」という意

味になっちゃう。表面的にみると、不定冠詞が入ってるかどうかで、主語 = bror が成り立つか成り立たないかが決まっているように見えない？前にも話題になったけど、英語の little と a little の違いにも不定冠詞がからんでるよね。この不定冠詞って、差を付けたいからとりあえず入れてみた、っていう理由で入ってるわけじゃないよね？なにか不定冠詞じゃなきゃいけない理由があるんだよね？

兄：ノルウェー語だけ見ていると、二つの用法を区別するために不定冠詞をいれているようにもとれるけど、ドイツ語でも「として」の als はふつつ無冠詞の名詞、「ように」の wie はふつつ不定冠詞つきの名詞と現れるね。だとすると不定冠詞が出てくるかそれとも無冠詞かは、「ように」と「として」の意味に関わっているのかもね。でもどんなふうに関わっているかは自分で考えて。

妹：出た！必殺質問返し！うーん、不定冠詞のほうはなんとなく分かる気がする。「一つの」という意味から、機能として「不定の」、さらに「(決定できないけど) ~のような」という意味に発達したんじゃないかな。つまり「~のような」という意味は、最初の「一つの」って意味からじゃなくて、二次的な不定の機能から出てきたニュアンスだと思う。でも分からないのは、「不定」冠詞に対立するのは「定まった」、つまり定冠詞のほうなのに、「として」のほうは無冠詞を使う。これって「わたしは~(職業)~です。」って言うとき無冠詞なのと関係があるのかな。でも英語は違うか…。

兄：でも、そういうときに無冠詞にならないのは、英語がどうかしてるんだよ。ヨーロッパの言語はそういうときには普通無冠詞だからね。

妹：仮に定冠詞が現れてくるとすると、「特定の」もの「として」というのはおかしいよね。限定された対象があるということになっちゃうから。もちろん例えば

## 27) 言語学カフェの兄さんは兄として妹に説教をする

という文では「言語学カフェの兄さん」=「兄」が成り立っているけど、その場合「として」の部分で表したいのは、「限定された一人の兄・言語学カフェの兄さんとして」じゃなくて、「一般的に兄

たる者として」という意味だよね。つまり「として」には一般的なものが来ないと。あ、そーか！不定冠詞や定冠詞を使うと、ある個体がどんな性質を持っているかが問題になったり、どの個体を指しているかが特定されたりする。「おばさん」の例で言うと、「あるおばさん」と「特定のおばさん」のどちらもなんらかの見方からの特徴づけが行なわれて、どちらも有標な表現になっちゃう。それに対してそういう特徴づけをしたくないような、一般的な「おばさん」を指したいとすると、自然にそういった有標の冠詞をつけない、無標の無冠詞形が出てくる。ここで「として」の話にもどると、「として」と一緒に使われる名詞は、一般的な概念じゃなきゃいけないから、無冠詞形が選ばれる、そーでしょ？

兄：うん、そんなところだろうね、きっと。兄的に満足な解答である。

妹：さて、兄さん、これだけははっきりさせておきましょうよ。問題の発言で兄さんは、わたしの応援の仕方が「おばさんっぼい」ということが言いたかったのであって、私が「おばさんそのものだ」という意味じゃなかったんでしょ？ね、どうなの？（詰め寄る）

兄：わかったわかった。「おまえはおばさんだ」じゃなくて、「おまえはおばさんっぼい」、これでいいんだろ？

妹：あれ？なんかそれもやっぱり許せない！

（みやした ひろゆき・くぼさやか）

MIYASHITA, Hiroyuki / Sayaka KUBO: Linguistic Café (4)